

一定範囲内の大きさの円礫ばかりを集め、運んできて配した理由は判然としない。またその時期も明確にできない。

焼土跡4基は、明らかに倒木によって生じた窪地を利用したもので、火を焚くには風の影響を受けにくく、焚き火用の穴をわざわざ穿つよりは、労せずして最初から穴が開いているのだから絶好の場所であったことであろう。残念ながら遺物を伴わず、遺構の時期さらには倒木のあった時期を明らかにはできない。

このような倒木によって生じた穴の利用は、当遺跡のような性格の遺跡よりもむしろ、集落遺跡ほど利用の頻度は高く、ごみ捨て穴のような場合にはなおさら遺物を伴い易くなると思われる所以、調査する意義はより大きい。また、全く利用されなかつたとしても、集落遺跡内では埋没過程で遺物が流没する確率も高いため、単に遺物を拾う目的でも倒木痕を調査する必要が生じる場合もある。

更に倒木痕の利用の例として、当遺跡に統いて原村教育委員会により96年度調査された清水遺跡では、倒木痕と平安時代の竪穴住居跡との重複が3箇所で確認されたということが挙げられる。これらは偶然の重なりではなく、土が柔らかく竪穴を掘り易いといった利点から意図的に倒木痕上を居住選地したものと考えられる。危うく倒木痕を、床面上の巨大ピットと誤認するところであった。

このように倒木痕は様々な形で利用されている。今回見つかった4つの焼土跡は、たまたま検出面に焼土が露出していたために発見に至ったが、焼土の上を自然埋没した腐植土が完全に覆っていたとしたら、調査には至らなかつたであろう。逆を言えば、全く調査しなかつた倒木痕にも、内部に焼土や遺物を含むものがあつて、知らずに終わったのかもしれないということである。昨今調査されることの少ない倒木痕だが、以上のようなことから次の2点が挙げられる。第一に、倒木痕を利用して二次的な遺構が形成される場合があるということ。第二に、単に自然に埋没した場合でも遺物を含む場合があり、それは集落遺跡ほどあり得、全く調査しないで良いとは言い切れないということ。以上を踏まえても、倒木痕の調査は調査期間・調査人員・予算といった事象との兼ね合いの中で調査の是非が検討されよう。当遺跡の調査では、倒木痕についてはこれ以上の調査は成し得なかつた。

## 2 落とし穴について

### ① 「おとしあな」に当てる漢字について

ある意味では末梢的な問題かもしれない「おとしあな」に当てる漢字について先ず述べる。「おとしあな」には「落とし穴」という字を用い、「陥し穴」という字は当てないこととした。これには理由がある。

「陥し穴」という当て字は落とし穴研究の先駆となった「霧ヶ丘」以降と考えられる。霧ヶ丘

では2つの論考において「陥し穴」が用いられている（今村1973・宮本1973）。最初に落とし穴を指摘した城之平遺跡の「蓼科」（宮坂・宮坂1966）では「落し穴」、霧ヶ丘でも別の2つの論考（石川1973・榎原1973）では「落し穴」である。その後の落とし穴研究では「陥し穴」が多く用いられ、今や主流となりつつある。霧ヶ丘以降の追随と考えられる。これに敢えて疑義を唱えるのは次の3つの理由による。

第1に「陥し穴」は中国語の「陥井」に由来すると思われるが、実際の漢字の読みとして存在しない点。第2に考古学を離れても「落とし穴」に普遍性がある点。第3に、狩猟の主体はあくまでも人間であって対象獣は狩猟の客体であるが、「落とし穴」の方がそのことを明確に示していると思われるという点。

詳述する。漢和辞典を調べると「陥」は、「陥る」と書いて「おちい。る」と読み、おちこむ。穴におちる。はまる。はまり込む。計略にかかる等の意味があり、「陥れる」と書いて「おとしい。れる」と読み、おちこませる。はめる。計略にかける等の意味がある。意味は後者において全く適切であるが、かといって「陥る」と書いて「おち。る」や「陥す」と書いて「おと。す」という読みはあり得ない。（尚「落し穴」についても正しい送り仮名は「落とし穴」である。）2点めは、考古学に無縁な人を10人なり100人なり選んで漢字で書いてもらえば明白で、殊更にこの学界だけ字を特殊化する理由は全くないということである。3点めは、動物が意に反して「おちいる」のではなく、人間が「おとす」ことを最初から目的として構築して動物を「おとす」のであるから、「落とす」と書いた方が人間＝主体、動物＝客体の関係が明確であると思われる。「陥」は「おとしいれる」よりも「おちいる」の方が第一義であることから「おちいる」の意味合いの方が強く、落とし穴を構築した人間よりも動物の方が落とし穴の主体であるかのようなニュアンスが生じやすい。対象獣がその意志に反し、あるいは予期せずして「おちいる」というニュアンスをわざと狙っているフシもあるが、これは上述のような理由で妥当ではないと考える。以上の事象が「落とし穴」と表記する理由である。

## ② 落とし穴の類型

前置きが長くなつたが本題に入る。今回見つかった31基の落とし穴には、平面形状・坑底小孔・分布域にいくつかの傾向がつかめる。先学の落とし穴の分類には様々なものがある。例えば、霧ヶ丘における今村分類と石川分類（1973）に先ず始まり、関東とその近県を含む複数の遺跡を総合した宮沢・今井分類（1976）、岩手県内の瀬川分類（1981）と田村分類（1987）、多摩ニュータウン遺跡の各分類（小坂井1983・小島1984・栗城1986・小松1986・武井1987・佐藤1989・中西1991・小坂井1991）、小山田遺跡群の堀金分類（1983）、館町遺跡の清水分類（1985）、九州の高橋分類（1994）などがある。しかしながら当遺跡にこれらの分類のいずれかを充当しようとすれば、できなくもないがどうもしっくりといかないものがあると感じた。その理由は次のような点にあるのではないかと考えた。

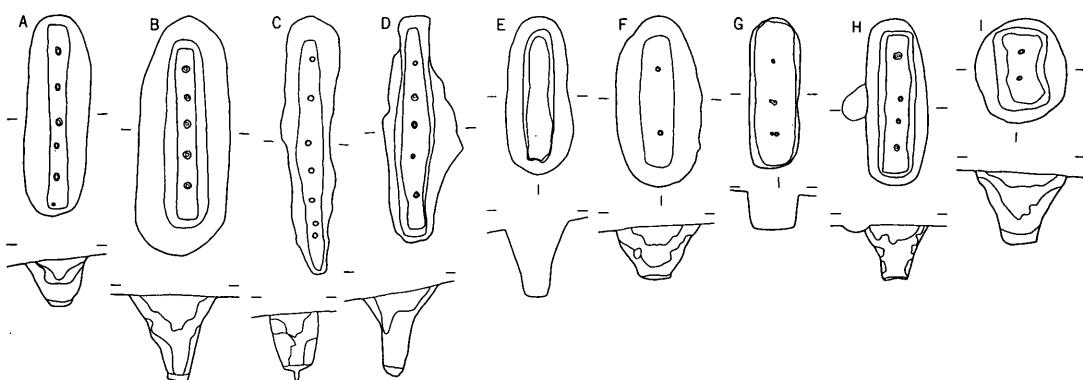
第一に、既に行われている分類は一定の時期に存続したものと対象としているものが多いと考えられる点である。例えば、関東で行われている分類は縄文早期後半を主体とするものである。当遺跡のものはもっと長い時間幅にわたって構築されたものの累積ではないかと考えている。

第二に、既に行われている分類の範疇では主流たり得ない類型が当遺跡では主流として存在している反面、既に行われている分類では主流の類型が当遺跡では存在していないといった事がある。関東に見られる類型、更には当原村に隣接する茅野市の各遺跡で近年多数見つかっている類型でも決して主流に成り得ない類型が占める率が当遺跡には多い。このことは第一の理由ゆえ当然の事であろう。

第三に、坑底小孔の数にこだわった分類が多く見られるが、私はこれにはあまり意義を見いだせない。とりわけ当遺跡に多く存在する細長い形状のものの坑底小孔の数は、その長さに応じて順次流動的に決定されるのではないかと考えられる。また、再利用の結果として坑底小孔の数が累積したものも少なくなく、一回に用いられた数を見極めなければ、単純に坑底小孔の数だけをカウントしても意味がない。

第四に、坑底の仕掛けが埋設方式か、打ち込み方式かという論議やそれによる分類があるが、当遺跡では調査時点の認識不足のため、この事を明らかにする截ち割り調査を、ごく一部の落とし穴でしか実施せずに調査を終えてしまった点にある。

これらのことから、落とし穴について以下に当遺跡独自の分類を試みてみたい（第39図）。隣接の茅野市でも各遺跡の報告で分類が成されているが、これらは落とし穴以外の土坑全般についての分類であり、これによって落とし穴をどうこう論じようというものではなく、あくまでも報告上の便宜的なものである。以下の分類も上述の既にある分類を否定するものではなく、あくまでも当遺跡の報告上の便宜的なものである。分類には、検出面の平面形状・坑底の平面形状・坑壁の形状・1セットと考えられる坑底小孔の数の幅、の4点を考慮した。結果、以下のA～Iの8類型を示す。



第39図 芝原尾根遺跡の落とし穴の8類型

- A：上面が長円形、坑底が溝状の長方形で、壁が傾き、坑底小孔が5つ以上のもので、小豊穴187が相当する。
- B：上面が長円形～隅丸長方形、坑底が溝状の長方形または溝状で、壁が途中で屈折し、坑底小孔は5つを基本とするもので、小豊穴8・186・228・346・389・425の6基が相当する。小豊穴346のみ坑底小孔が4つである。壁の屈折の仕方は、下半が垂直に近く、上方が開放する朝顔形・漏斗形の形状である。
- C：上面・坑底ともに溝状で、壁は垂直に近いが若干傾き、坑底小孔は5つ以上のもので、小豊穴102・103・111・115の4基が相当する。
- D：上面・坑底ともに溝状で、壁は屈折、坑底小孔5つ以上のもので、小豊穴106・123の2基が相当する。壁の屈折の仕方は、Bと同じである。上面の平面形は溝状であるものの、坑央部のみ外側へ開放する傾向がある。
- E：上面が長円形、坑底が溝状で、壁は屈折し、坑底小孔をもたないもので、小豊穴4のみである。壁の屈折の仕方は、B・Dと同様である。
- F：上面は陸上のトラックのような長円形、坑底は長方形で、A～Eに比して1.5～3倍の坑底幅があり、壁は傾き、坑底小孔が2つか3つを基本とするものである。小豊穴172・192・209・237・312・355の6基が相当する。
- G：上面・坑底とも陸上のトラックのような長円形または隅丸長方形、A～Eの1.5～3倍の坑底幅があり、壁は傾き、坑底小孔は2～4基を基本とするもので、小豊穴6・13・121・185の4基が相当する。
- H：上面は長円形または隅丸長方形で、坑底はA～Eの1.5～3倍の坑底幅をもつ長方形、壁はB・D・Eと同様に屈折し、坑底小孔は2～4基のもので、小豊穴223・244・406の3基が相当する。小豊穴223は坑底幅がもう少し狭いとBとし得るかもしれない。
- I：上面は円形に近く、坑底は長方形または中くびれの撥形で、壁はB・D・E・Hと同様に屈折し、坑底小孔は1～3である。小豊穴5・325・326・354・359・429の6基が相当する。

以上の8類型を坑底小孔の限定的な数でも分類すると、C5型、C6型、H2型、H4型などというように類型数は更に増えるが、これは既に述べたような理由で意義が無いばかりか繁雑さが増すだけである。むしろ、類型数を減らすように考える方がより意義を見いだせる。

例えば、A～Dは坑底が溝状で坑底小孔が5つ以上という点で、ひとつのタイプであると見なすこともできる。とりわけ検出面における平面形状は、先学の分類法でも指摘があるように、実際に何処から掘り込まれたものかが明らかにできない以上、当てにならない面がある。A・Cのタイプの5基は、検出面よりずっと上方より掘り込まれていた可能性があり、その場合上方では開放していたと考えられる。即ちBのタイプに接近する。

また、FのタイプとGのタイプも坑底のつくり出しが明確に分けられる訳ではなく、主観の問

題もあって判断に苦慮する場合もあり、不可分な状況にあるだろう。

概観すると、主に次の4つに大きく分けることも可能ではないだろうか。

A～Dの、上面の長幅比3:1以上と細長く、坑底が溝状で長幅比5:1以上、坑底小孔5つ以上のタイプ。

Eの、上面の長幅比3:1と細長く、坑底の長幅比が5:1の溝状で、坑底小孔をもたないタイプ。

F～Hの、上面の長幅比2.5～3:1、坑底の長幅比3～5:1で、坑底小孔が2～4のタイプ。

Iの、上面の長幅比2:1以下で円形に近く、坑底の長幅比2～3:1で、坑底小孔1～3のタイプ。

形態の比較を隣接する茅野市と行ってみると、A・Bのタイプは稗田頭A遺跡にわずかに認められるが、A～Dのタイプは茅野市ではほとんど存在しておらず、Eのタイプは天狗山遺跡などわずかに見られるが当遺跡同様に希有である。F～Hのタイプは茅野市にも天狗山・梵天原・上の平遺跡など多くに見られる。梵天原遺跡の分類では第I群1類、上の平遺跡の分類では第II群2類とするものに似た形状のものが多く見られるが、当遺跡のものの短軸の断面はHのタイプを除いてあまり漏斗状の形状を示していない。Iのタイプも茅野市には多く、梵天原遺跡の分類では第I群2類、上の平遺跡の分類では第I群5類・第II群1類とするものに酷似するものがある。

原村内の落とし穴は臼ヶ原遺跡において6基、御射山遺跡で1基が見つかっているが、臼ヶ原遺跡のFのタイプ2基以外は、当遺跡の分類では捉え難い。

### ③ 上方が開放する落とし穴の形状について

B・D・E・H・Iの落とし穴では、坑底から途中までは垂直に切り立ち、途中で角度がついて上方では外側へ向かって開いている。即ち、朝顔形・漏斗形・ラッパ形の形状である。これは、短軸方向で特に顕著であり、この形状を成す落とし穴は、落とし穴全体に占める比率にして55.4%と半数を越える。前述のように落とし穴の検出面と落とし穴の構築時の地表面とが一致しないと考えられるため、実際の比率は更に高まると考えられる。この形状は上方が崩れたものとされる場合があるが、今回の調査で見つかったものは崩れではあり得ず、当初よりこの形状を成していたものと考えられる。とりわけ、B・Dのタイプは、坑壁に掘削痕がよく確認でき、上方が崩れた訳ではないことがよく判る。この形状は、「開口部を落し捕獲する部分、中断から坑底までを捕獲したものが身動きできなくなるように拘束する部分と、部位による目的が定まっていた」(小林1991)とするのに賛同できる。

更に特徴的な状態として、短軸の断面を観察すると坑底から坑壁の途中まで、地山酷似の極めて大きなローム・ブロックが坑壁際に貼り付いているものが見受けられる。この傾向は、小豎穴13・102・103・111・172・186・209・228・346・359・389・406・425といった多くの落とし穴で

認められ、とりわけ小豎穴102ではこれを地山と誤認して狭く掘りあげ、完掘写真まで撮影してしまった。このローム・ブロックも従来崩れと考えられてきたものである。つまり、上部の崩れ=開口部、その崩落土の堆積=このローム・ブロックという図式で論じられてきたのではないだろうか。しかし、崩れではもっと無秩序な状態を成すはずであり、坑壁にピッタリ貼り付くという状態では堆積しないであろう。決して三角堆土などではあり得ない。これは坑底を当初からTピット状に掘るのではなく、まずU字状に掘ってから「貼り壁」を行って最終的にTピット状に仕上げるというように考えると、落ち込んだ捕獲獣の四肢の自由を束縛するという前述の機能をより高めることに成り得る。この場合、土坑として実際に機能していたのは小豎穴102で狭く掘りあげて完掘写真を撮った形状そのものということになり、坑壁際のローム・ブロックを取り除いた、通常完掘状態としているものは掘り形という事になる。同様な所見は県埋蔵文化財センターによって当遺跡と同年に調査された、茅野市の笛原上遺跡でも得られ、そちらで詳しい報告があることであろう。

#### ④ 落とし穴の立地

尾根頂部や尾根平坦部に位置するもの、緩斜面に位置するもの、急斜面に位置するものがあり、更には長軸が等高線に対して平行なもの、垂直なもの、斜方向のものなど、多岐にわたる。散漫且つ無秩序にも思えるが、一定の傾向が窺える。

A～Dのタイプは尾根頂部か尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに単独といつていいほどに散在するか、急斜面に集中する。尾根頂部に位置するものは、尾根の方向と同方向、即ち等高線と垂直な方向に長軸をとり、尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに位置するものも尾根の方向と同方向、即ち等高線と平行な方向に長軸をもっている。K区小豎穴8だけは尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに位置しながら、等高線と垂直方向に長軸がある。急斜面に集中するものは、長軸が等高線に対して斜方向のものもあるが、多くは斜面の方向と同方向、即ち等高線と垂直の方向にある。集中箇所は東尾根K区の南斜面と西尾根F区の北斜面である。しかしながら、集中している群の併存性は立証できない。

F～Hのものは散在し、一定の傾向を抽出するのは困難であるが、急斜面には存在せず、尾根頂部か緩斜面にあり、全般に等高線方向すなわち斜面と垂直方向に長軸をもっている。

Iは、D・E区だけに存在し、E区の小豎穴5は単独、D区のものは集中して構築されている。しかしながら、D区のものが累積の結果なのか同時に存在したのかは分からぬ。

従来の研究成果では、落とし穴は谷を意識し、谷に向かって構築されるとされるが、この傾向はA～Dのタイプに顕著である。

#### ⑤ 坑底施設の設置方式

落とし穴の坑底施設が埋設方式か打ち込み方式かという議論が今まで成されてきている。最近

の調査では截ち割り調査の実施により、ほとんどの落とし穴の坑底施設は埋設方式である、即ち掘り形をもっているということが判ってきたとされる。しかし、これは縄文早期後半を主体とする関東地方のものに言えることであって、このことを盲信的に当該地方の落とし穴にも援用することはできないと私は考えている。また多摩ニュータウン遺跡では、両者の境を坑底小孔の口径15cmを越えるか否かというあいまいな基準で分けている場合もあり、この基準で判断すれば当遺跡の坑底小孔はすべて15cm以内、つまりすべて打ち込み方式ということになってしまう。もちろん、この議論は截ち割り調査をすべての落とし穴に実施した後に論じ得る事になるが、前述のようにごく一部のものでしか実施できなかった。しかし、その一部のものの結果と他の事象を加味して確実に指摘できることがあるので詳述する。

Iのタイプでは、1基も断ち割り調査を実施していない。調査時点ではすべて打ち込んでいるものと捉えたが、円形に近いタイプは関東地方に多く見られ、掘り形を設けて複数の棒状施設を埋め込むことが分かってきているとされる。このことから、Iのタイプが掘り形をもっていた可能性がある。一穴タイプの小豎穴5は、他の落とし穴に比して底部小孔の口径が大きく、掘り形をもっていたとも考えられる。また、小豎穴325・326・359・429のような底部小孔がより小さくて集中または近接するタイプも、関東地方同様に掘り形を設けてから複数の棒状物を突き立てた可能性が考えられる。

次にF～Hのタイプも、調査時点ではすべて打ち込み方式と判断した。底部小孔は木質部の太さしかなく、掘り上がった小孔は木質部の腐朽部分である。この周囲にロームの突き固めが行われたか否かは截ち割り調査の結果判断ということになるが、平面調査でも次の点が指摘できる。再利用している落とし穴（小豎穴6）及び再利用の疑いのある落とし穴（小豎穴121・312）では、2度目の孔を穿ったとき、近接する1度目の坑は2度目の孔の掘り形に取り込まれ、残存しないはずである。しかし、これが残存しているということは打ち込み方式によるということの証しである。このことがもっともよく判るのは小豎穴6であり、これと同タイプの小豎穴13・172・192・209・237・406も打ち込み方式であった可能性が高い。

更にA～Dのタイプは打ち込み方式であると断言できる。小孔内に木質部が残存した小豎穴228・389（Bのタイプ）では、これらの取り上げを行なう際截ち割りを行ったが、均質なハードロームの地山で掘り形はなかった。また、小豎穴244（Bのタイプ）でも調査の最後に攢乱の崖を利用して、截ち割りを行ったが掘り形はなかった。小豎穴111（Cのタイプ）では調査時、作業員が掘り過ぎてしまい、底を抜いてしまった。坑上半は地山がローム、坑底付近は地山がスコリアであったが、掘り過ぎた底部においても小孔=木質部の径しか残っておらず、小孔とスコリアの間にはロームが認められない、すなわちロームの突き固めがなく小孔の周囲は均質なスコリアであった。ロームを全く用いず、あるいは偶然にも混ざることなく、締まりのないスコリアを突き固めることは考えられない。さらに、Gのタイプの小豎穴6について上述したように、小豎穴111にも再利用の結果である打ち直し痕が認められるため、この点からも小豎穴111は打ち込み

方式によることが判る。

決定的に打ち込み方式であることは小豎穴389で出土した木質部が物語っている。これは先端が鋭利に調整され、角材のような面取りがなされている。「縄文時代にはノコギリがないので木を最短距離で切ることはできない。石斧を何度も打ち当てて切った木の先端は必然的に尖る。したがって先端が尖っているからといって杭であるとは限らない」という指摘を整理段階で受けた。しかし実測図では判りにくいが、小豎穴389出土の木製品の実物を見れば、誰しもそれが明らかに杭として調整され、切りっぱなしの材でないことは瞬時に理解できる。このことからA～Dのタイプの坑底施設が打ち込み方式であることは間違いない。

従って、A～Dのタイプは確実に打ち込み方式によるものであり、F～Hのタイプも恐らくは打ち込み方式によるものであろう。以上のことから、坑底小孔のないEタイプ、上面の形状が円形に近いIのタイプを除くと芝原尾根遺跡の少なくとも8割の落とし穴の坑底施設が打ち込み方式により設置されていることが指摘でき、この点でも関東地方の落とし穴群とは大きく異なっている。

坑底に木杭を打ち込んだ場合、捕獲獣に致命傷を与えるように逆茂木として上端を調整するには、打ち込んだ後に調整しなければならない。これは明らかに仕掛けの設営上不合理であり、非能率的である。したがって上端は尖っていないかったと考える方が自然で、捕獲獣を串刺しにするものではなく、捕獲獣の四肢が坑底に接地しないようにしたり、坑壁に引っ掛けられないようにしたりする、すなわち宙ぶらりんの状態で動物の自由を奪うという主旨の仮説（今村1973）に賛同できる。捕獲獣の肉が腐らないためには死なずにもがいていた方がいい、更には罠猟ならば見巡りのインターバルを長くすることもできるという点で、先端が尖っている必要はない。捕獲獣の肉の鮮度や毛皮の採取を考えるとこの方が理に適っていよう。

## ⑥ 落とし穴の時期

落とし穴群の時期は縄文時代であろうとは思われるがそれ以上は判然としない。これは小豎穴185の土器片、小豎穴228・389の木片。木製品を除き遺物が出土しないため、先学の研究成果との比較検討により形状で類推するほかない。また仮に遺物が出土したとしてもその遺物のみで時期判定を行うのは帰属性が疑わしく極めて危険である。例えば、平安時代に構築された小豎穴でも埋没過程で縄文土器片を取り込むことは十分に考えられるため、その遺物は時期の上限しか示さないことになる。つまり、落とし穴から出土する遺物が意図的に埋置されたことが判るものでない限り、落とし穴を特徴づける遺物とは成り得ない。

形状による類推では、Iのタイプは隣接の茅野市の調査結果から、主に縄文時代早期後半に比定され得るが下限は中期初頭まで下る可能性もある。参考までに全国の例も挙げる。関東地方に普遍的にみられる早期後半とされるタイプも平面形状や坑底小孔の特徴は似ているものが多くあるが、それらは当遺跡や茅野市例のように短軸の断面形が顕著な漏斗形を示すものはあまり多く

ない。短軸の断面形状が漏斗形を成す点を除いては同形状のタイプは東北～九州まで存在し、東北を除くと普遍的であるが、北陸地方では前・中期、中国地方では早期にもわずかにあるが多くは後・晚期、九州地方では早・前期を主体として晚期までと、形状による比較だけでは判然としない。主流の形状ではない東北地方では早・前期に推定され、北海道ではほとんど見られない。当遺跡のIのタイプの坑底施設の設置方式は調査時点では打ち込み方式と捉えたが、打ち込み方式は北陸地方で多く認められている。

F～Hのタイプは関東・東北・九州にも似た形状のものがあるが、それらをもち出すまでもなく茅野市・諏訪市に良好な調査例が多い。茅野市の調査結果からは中期初頭以前とされ、諏訪市のジャコッパラ遺跡の1区A4号小竪穴では炭化物のC14年代測定により前期後半から中期前半が与えられている。

Eのタイプは希有なため時期に関しては判然としない。全国の例では底部無小孔のものも少くないが、形状的にはEのタイプと異なっている。

隣接する茅野市にもあまり認められないA～Dのタイプは、主流たり得ずに関東全般にも分布しているが、多くは東北地方に見られ、中期末～後期前半の所産とされている。しかしながら、むしろEのタイプを更に長くしたような形状の底部無小孔のものの方が主流で、このようなタイプは東北・北海道と県内では飯山市に見られる。したがって、坑底小孔が必ず5基以上ある当遺跡は特異な傾向にありそうである。諏訪市のジャコッパラ遺跡の1区A5号小竪穴は当遺跡のBのタイプに相当し、坑底に近い層の炭化物のC14年代測定では前期後半から中期前半とされている。また、当遺跡と同年度に調査された原村内の清水遺跡では、Bのタイプが中期後半の住居跡の床面を壊して構築されており、それ以降であることが分かる。しかし、下限がどこまで下るかは判然としない。実際に山梨県丘の公園第5遺跡では当遺跡に酷似するBのタイプが見つかり、坑壁の明瞭な掘削工具痕が金属製を思わせるためか、「古代以降、特に中世あたりの所産」と報告されている。実際にB～Dのタイプのものは、①掘削痕が極めて明瞭なものが多い、②前述の“貼り壁”工法のものが多い、③坑底施設が間違いなく打ち込み方式による、などの特徴がある。小竪穴389（Bのタイプ）の木製品は杭先の調整が精巧で、縄文時代の所産であることには疑義を抱かしめるものである。現在のところ小竪穴228・389の木片・木製品にはC14年代測定を実施しておらず、これらの時期を呈示できない。以上のことから、A～Dのタイプが縄文中期には確実に出現しており、古代以降にも存続あるいは再出現する可能性が考えられる。

雑漠ながら落とし穴の時期について述べた。大雑把にはIのタイプ→F～Hのタイプ→A～Dのタイプという変遷がたどりそうである。落とし穴については時期判定材料に欠けることが今後も調査する当初より分かっているので、是非とも何らかの手立てを講じる必要がある。その場合、坑底施設の木製品以外の土器片・石器などの遺物は当てにならない。「出土遺物の時期は陥し穴の時期とは殆ど関係ないのが一般的と見るべき」。「陥し穴から遺物が出土する場合、その地に既にある遺物包含層から掘り上げられたものが混入したと見るべき」という論旨（高橋1994）には

大いに賛同する。八ヶ岳山麓地域では、時期の特定できる土層（例えば火山灰など）も期待できない。他遺構との重複関係も稀にしかり得ない。最も有効と考えられるのは、ジャコッパラ遺跡の実践のように落とし穴の遮蔽物と見られる炭化物による年代測定であろう。落とし穴の最下層である坑底直上には、黒色粘質の層が堆積していることが少なくない。これは落とし穴の遮蔽物であったという推定もでき、この層中の炭化物を落とし穴の類型別にサンプリングすることが今後肝要になると思われる。今回の調査では遺構実測や完掘写真撮影を優先するあまり、この最下層を何の疑問ももたずには排土置き場へ運んでしまったことが悔やまれる。勿論、年代測定は調査予算との兼ね合いの中で初めて可能となることであろうが、落とし穴の研究にはデータの累積が不可欠ではなかろうか。

### 引用・参考文献

- 宮坂英式・宮坂虎次 1966 「別編 城之平堅穴群遺構遺跡」『蓼科』
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 石川和明 1973 「土壌群についての考察」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 榎原松司 1973 「獣場についての一私考」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 宮本常一 1973 「陥穴」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27 物質文化研究会
- 宮澤 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題 ーいわゆる落し穴についてー」『調査研究集録』第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」『紀要1』(財) 岩手県埋蔵文化財センター
- 村田文夫 1981 「縄文時代の土壌は陥か 松山義雄著『狩りの語部』からー」『かけら』第2号 日本大学先史学会
- 小松真名 1981 「N o. 804遺跡 III 土坑の調査について」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第1集 多摩ニュータウン遺跡』(第4分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小坂井孝修 1983 「N o. 511遺跡 IV まとめ 土坑について」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第4集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 堀金 靖 1984 「小山田N o. 15遺跡 III 縄文時代の遺構と遺物 4 土坑」『小山田遺跡群IV』小山田遺跡調査会
- 斎藤 進・小島正裕 1984 「N o. 740遺跡 III 遺構と遺物 6 土坑(陥し穴)」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集 多摩ニュータウン遺跡』(第7分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 清水比呂之 1985 「第VIII章 第1節 土坑形態の規格性とその変遷」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 伊藤 健 1985 「第VIII章 第2節 土坑の構築法 ー坑底施設の構造把握ー」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 山口剛志 1985 「第VIII章 第3節 陥穴における群の存在とその意義」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 藤 健 1986 「第IV章 第1節 土坑の構造把握 ー坑底施設批判ー」『館町遺跡 II』八王子市館町遺跡調査団
- 栗城謙一 1986 「N o. 406遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 F 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集 多摩ニュータウン遺跡』(第2分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター

- 小松真名 1986 「N o.597遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 陥し穴土坑」「IVまとめ」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集 多摩ニュータウン遺跡』(第4分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 平出一治・日達 厚 1986 「3 いまでの調査」『御射山遺跡』原村教育委員会
- 田村壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要VII』(財) 岩手県文化振興事業団・埋蔵文化財センター
- 伊藤 健 1987 「第III章 第1節 土坑群の構造把握 -狩獵領域立地研究序説-」『館町遺跡III』八王子市館町遺跡調査団
- 武井利道 1987 「N o.386遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「IVまとめ」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集 多摩ニュータウン遺跡』(第2分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 武藤雄六・平出一治 1987 「IV 遺構と遺物 1 縄文時代の遺構」「IV 小竪穴について」『臼ヶ原遺跡』原村教育委員会
- 五味裕史 1988 「IV 遺構と遺物 1. 1区」『ジャコッパラ I』諏訪市教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 辻本崇夫 1988 「IV 遺構と遺物 4. 陥し穴状遺構の機能した時期と遮蔽物として利用された植物」『ジャコッパラ I』諏訪市教育委員会
- 佐藤宏之 1989 「陥し穴獵と縄文時代の狩獵社会」『考古学と民俗誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』六興出版
- 佐藤宏之 1989 「N o.426遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 B 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第10集 多摩ニュータウン遺跡』(第5分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 武井利道 1990 「N o.789遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 D 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第11集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 保坂康夫 1990 「第5章 縄文時代の遺構と遺物 第1節 陥し穴」「第8章 古代以降の遺構と遺物 第1節 陥し穴」「第10章 結語 陥し穴の立地」『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター
- 稻田孝司 1991 「西日本の縄文時代陥し穴獵」『論苑考古学』天山舎
- 中西 充 1991 「N o.366遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構と遺物 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小島正裕 1991 「N o.213遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集 多摩ニュータウン遺跡』(第4分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小坂井孝修 1991 「N o.382・384遺跡 IV 成果と問題点 縄文土坑について」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集多摩ニュータウン遺跡』(第4分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小林深志 1991 「第V章 まとめ 第2節 縄文時代 (1) 土坑」「上見遺跡」茅野市教育委員会
- 1992 「N o.107~109遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第14集 多摩ニュータウン遺跡』(第3分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小島正裕 1992 「N o.496遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 C 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第14集 多摩ニュータウン遺跡』(第3分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 安斎正人・佐藤宏之 1993 「マタギの土俗考古学 -岩手県沢内村での戻獵の調査」『古代文化』11 (財) 古代學協会
- 大野尚子 1993 「縄文時代早期～前期の陥し穴状土坑について」『湘南藤沢キャンパス内遺跡第1巻 総論』慶應

### 義塾

- 百瀬一郎 1993 「第IV章 遺構と遺物 第5節 土坑」「第V章 まとめ」『天狗山遺跡』茅野市教育委員会
- 青木正洋・五味裕史・高見俊樹 1993 「III 過去における調査」「IV 平成4年度遺跡分布予備調査の概要」『ジャコッパラII』諫訪市教育委員会
- 小島正裕・鶴間正昭 1994 「古代の陥し穴土坑をめぐって」『研究論集』XIII 東京都埋蔵文化財センター
- 高橋信武 1994 「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究 熊本大学文学部考古学研究室創設20周年論文集』龍田考古会
- 小林健治・武居八千代 1994 「第IV章 遺構と遺物 第2節 縄文時代(2) 土坑」「稗田頭B遺跡」茅野市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1994 「第6章 1 縄文時代」『上野遺跡V』飯山市教育委員会
- 長谷川豊 1995 「縄文時代におけるシカ獣の技術的基盤についての研究－静岡県・大井川流域の民俗事例調査から－」『静岡県考古学研究』No. 27 静岡県考古学会
- 山本孝司 1995 「No.951・952遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 D 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第19集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 功刀 司 1995 「第III章 発掘された遺構と遺物 第2節 縄文時代の遺構 4. 土坑」「第V章 結語」「稗田頭A遺跡」茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1995 「第IV章 検出された遺構と遺物 第2節 縄文時代の遺構 4. 土坑・ピット状遺構」「第V章調査の成果と課題 第2節 上の平遺跡の落とし穴状土坑について」『上の平遺跡』茅野市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1995 「7 VII地区の概要」『小泉弥生時代遺跡』飯山市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1995 「第3章 縄文時代 1 遺構 B 土坑」「須多ヶ峯遺跡」飯山市教育委員会
- 功刀 司 1996 「第III章 発掘された遺構 第3節 縄文時代の遺構 5. 土坑」「北山菖蒲沢B遺跡」茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1996 「第II章 遺跡の概観」「第IV章 検出された遺構と遺物 第1節 縄文時代の遺構」「第V章 調査の成果と課題 第1節 梵天原遺跡の落とし穴状土坑について」『梵天原遺跡』茅野市教育委員会
- 栗城謙一 1996 「No.114遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 C 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第28集 多摩ニュータウン遺跡』(財) 東京都埋蔵文化財センター